

被災地の復興考えよう

岡山・オンライン交流会

岩手・大槌から現状報告

東日本
大震災
10年

2011年の東日本
大震災から3月で10年



東日本大震災の被災地支援の在り方について
考えたオンライン交流会＝オルガホール

になるのを前に、県内の団体が支援を続ける岩手県大槌町とのオンライン交流会が開かれた。岡山県内6会場と同町内2会場などをビ

デオ会議システム「Zoom（ズーム）」で結び、約90人が今後の復興支援の在り方を考えた。

国際医療ボランティア

アAMD A（岡山市）が同町内に11年に設けた「健康サポートセンター」の佐々木賀奈子センター長や、岩手県立大槌高の生徒でつくる復興研究会などが活動を報告した。

佐々木センター長は、マッサージやはり・きゅうで被災者の心身を支えるセンターの役割を紹介。「住民の交流の場になればこの思いから、体操教室やパン作り教室なども開いてきた」と述べた。大槌高の復興研究会は、13年から取り組む定点観測を報告した。生徒たちはさら地のままの写真を示し「復興

はまだ終わっていない。多くの人に現状を知ってもらうためにも後輩に活動を継いでもらいたい」と話した。

岡山の会場の一つ、オルガホール（岡山市北区奉還町）では市民ら38人が参加。主婦上里安裕美さん（36）＝岡山市東区瀬戸町南方＝は「被災地の今を正しく知り、伝えることが重要。私も可能な支援には積極的に参加したい」と話した。

交流会は、大槌町の支援を続ける生活協同組合おかやまコープ（同市北区奉還町）が企画した。

（矢吹喜一郎）